

病害虫発生予察情報（2月予報）

平成31年1月30日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
トマト	灰色かび病	発生量：少 (発病株率 5.4%)	1月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	葉かび病 すすかび病	発生量：やや少 (発病株率 14.8%)	1月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：並 (発病株率 2.5%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 2.2%)	1月中旬発生量 黄化葉巻病：並(±) コナジラミ類：多(+) 気象予報：気温：並(±)
タマネギ	腐敗病	発生量：並 (発病株率 1.0%)	1月下旬発生量：少(－) 防除員からの情報：やや多(+) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	灰色腐敗病	発生量：並 (発病株率 0.0%)	1月下旬発生量 ：並(発生なし)(±) 防除員からの情報：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	ネギアザミウマ	発生量：やや少 (寄生株率 38.1%)	1月下旬発生量：やや少(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(±)
レタス (非結球レタスを除く)	べと病	発生量：少 (発病株率 1.4%)	1月中旬発生量： 少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	斑点細菌病	発生量：少 (発病株率 2.8%)	1月中旬発生量： 少(発生なし)(－) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
イチゴ	うどんこ病	発生量：並 (発病株率 1.1%)	1月下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(±)
	灰色かび病	発生量：やや少 (発病株率 1.1%)	1月下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±) 降水量：並～少ない(－)
	アブラムシ類	発生量：並 (寄生株率 1.2%)	1月下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並(±)
	ハダニ類	発生量：少 (寄生株率 12.2%)	1月下旬発生量：少(－) 気象予報：気温：並(±)

	アザミウマ類	発生量：並 (寄生株率 3.6%)	1月下旬発生量：並(±) 気象予報：気 温：並(±)
--	--------	----------------------	-------------------------------

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

＜生育の概況＞

生育は平年並である。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 1.0%（平年 4.3%）と平年より少ない発生となった。
- ・ 本病の生育適温は23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。しかし、ハウスの閉め切りによる多湿で発生が増加することから引き続き注意が必要である。

防除対策

- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●葉かび病、すすかび病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 12.5%（平年 13.7%）と平年並の発生であった。
- ・ 生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・ 本県では12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率 3.2%（平年 2.9%）と平年並の発生であった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率 12.0%（平年 3.3%）と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並であるため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を特には助長しない。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【タマネギ】

<生育の概況>

降雨が少なく、生育は平年より7日遅れている。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、平均発病株率0.2%（平年2.9%）と平年よりも少なかった。但し、防除員からの情報では、やや多いとの報告がある。
- ・本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすく、気温が高いと感染・発病が助長される。1か月予報では、気温は並で降水量が平年並～少ないため、本病の発生は特には助長されない。

防除対策

- ・傷んだ葉がある場合は、降雨の直前に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では発生は確認されなかった（平年平均発病株率0.0%）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがある（ボトリチス葉枯症）が、ボトリチス葉枯症の平均発病株率は0.0%（平年0.7%）と平年より少なかった。
- ・本病は多雨で発生が助長されるが、1か月予報では降水量は平年並～少ないため、特には助長されない。

防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。薬剤の選択に当たっては病虫害防除基準（URL：<http://www.s-boujo.jp/>）を参照する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率 26.8%（平年 36.3%）と平年よりもやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並～少ないが、気温は平年並のため、本種の増殖をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 例年、2月中旬以降気温が高くなると増殖が盛んになり、寄生密度が高まる。このため、密度が高まる前に防除を実施する。成幼虫ともに株元の葉と葉の隙間に多く寄生しているため、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育は平年より早い状況である。

●べと病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年発病株率 1.8%）。
- ・ 病原菌の生育適温 10～15℃で、多湿を好む。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年 2.3%）。
- ・ トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる。1か月予報では、気温は平年並で、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない。
- ・ 凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げる大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●ビッグベイン病

1月中旬の巡回調査では、平均発病株率3.6%（平成1.9%）と平成より多い発生であった。本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。例年、志太地区で発生が多いため、当該地域では特に発生に注意する。

【イチゴ】

＜生育の概況＞

生育は平成よりやや早い地域から遅い地域まであり、地域によってばらつきがある。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、県全体の平均発病株率は3.0%（平成1.3%）であったが、一部の多発ほ場を除くと、平成並の発生であった。
- ・本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平成並であるが、ハウス内の気温は本病の発生には適する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、発病株率は0.5%（平成0.6%）と平成並の発生であった。
- ・本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平成並であるが、ハウス内は多湿になりやすく、ハウス内の気温も本病の発生には適する。

防除対策

- ・天窓、側窓の開閉、かん水に十分注意し、ハウス内が多湿にならないようにする。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・枯葉、老化葉及び不要な果梗枝は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.6%（平成1.8%）と平成並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平成並のため本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシのマミーの発生状況をよく観察する。
- ・アブラムシ類が多発した場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率9.6%（平年13.8%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並のため本種の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤や天敵を利用する。また、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類、天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。
- ・ハダニ類が多発した場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、県平均寄生株率1.9%（平年2.1%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並のため本種の発生を特に助長しない。ただし、例年2月中下旬以降に発生が多くなるため注意する。

防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期に防除を徹底する。
- ・ハダニ類とアブラムシ類の天敵を利用している場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響のない薬剤を選択し散布する。

【チャ】

<その他の病害虫>

●赤焼病

病原菌は細菌である。本病は寒害、霜害によって発生が助長されるため、凍霜害が発生する（した）場合は注意が必要である。初発を確認したら速やかに銅を含む殺菌剤を散布し、その後発生状況をみながら追加防除する。また、常発ほ場で凍霜害を受けた場合には発病を待たずに速やかに薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、つゆひかり、おくひかりなどの品種は注意する。

●チャトゲコナジラミ

寄生密度の高い茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くようにていねいに散布する。マシン油乳剤を散布すると赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の発生が心配される茶園では、マシン油乳剤を散布する1週間前までに、銅を含む殺菌剤を散布する（マシン油乳剤との混用散布は、殺菌剤の効果を著しく低下させるため行わない）。

3 季節予報

(1) 1か月予報（東海地方 平成31年1月24日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 1月26日から2月25日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、低い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	30	40	30
1か月	降水量	40	40	20
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	50	30	20
3～4週目	気温	30	30	40

【予報の対象期間】

1か月 : 1月26日(土)～2月25日(月)
1週目 : 1月26日(土)～2月1日(金)
2週目 : 2月2日(土)～2月8日(金)
3～4週目 : 2月9日(土)～2月22日(金)

(2) 3か月予報（東海地方 平成31年1月25日 名古屋地方気象台発表）

【予報期間】 2月から4月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

2月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年に比べ曇りや雪の日が多いでしょう。

3月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

4月 天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			2月			3月			4月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	40	40	30	30	40	20	40	40	20	30	50

【降水量】

3か月			2月			3月			4月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
20	40	40	40	30	30	20	40	40	20	40	40

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	2月	3月	4月	2月	3月	4月
浜松	6.5	9.7	14.6	78.3	149.4	167.5
静岡	7.3	10.3	14.9	102.6	216.8	209.9
三島	6.3	9.5	14.4	88.3	164.4	149.3

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
